

ふるさとへぐり再発見

弥生の祭「銅鐸祭祀」

3



弥生時代には近畿地方を中心に銅鐸という鐘状の鑄造物を用いた祭が行われました。

本来の用途ははっきりしませんが、狩猟や農耕に関係する絵のある例があり、豊猟・豊作を願った祭の道具と考えられています。

銅鐸は釣手の形状から四つに大別されており、大きさも徐々に大きくなります。

この辺かは聴く銅鐸から見る銅鐸への変化です。古いタイプは中に棒状の舌を吊って揺り鳴らしましたが、新しいものは吊り手が薄くなり据え置いて見るだけになります。

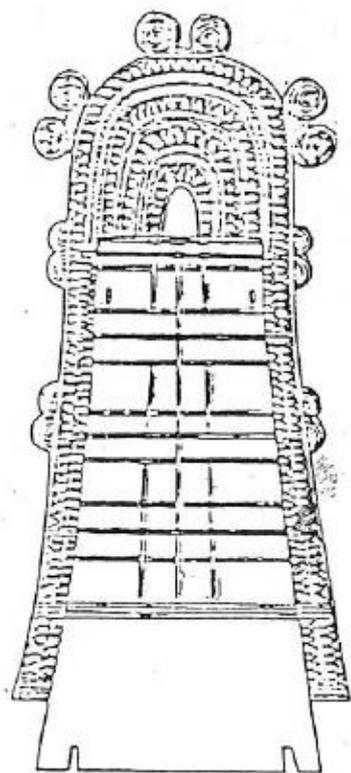
昭和五十五年三月二日、当時小学生であった後藤少年が廿日山の土取り場崖下で銅鐸を発見、その後昭和五十七年に町委へ届け出たのです。

これは高さ約二十二cmの外縁付鈕式で二番目に古いものです。がいえんつきちゆうしき(中期前半頃)内面には舌のあたる突帯部分の痕跡が残っています。

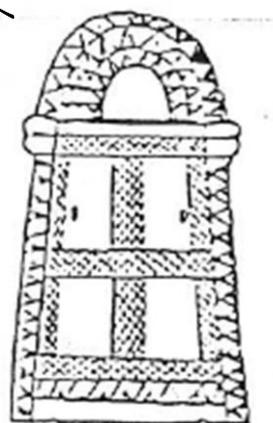
これまで奈良県では、十ヶ所で十四例が出土しており、伝承例も五例しか知られておりません。廿日山遺跡での銅鐸の出土は、この遺跡の県下での重要性を示しているのです。

廿日山遺跡は、弥生時代中期後半には開かれ始めたことが、発掘調査で分かっており、銅鐸を所有する集団が村を開いたのかもしれませんが。

前回掲載した住居跡に住んでいた人々が祭ったと考えられ、銅鐸と関係集落が発掘調査でつながった好例と言えるでしょう。



聴く銅鐸(小型)から
見る銅鐸(大型)へ



▲廿日山出土品略図